

博士論文要約

論文題目

特別養護老人ホームの入所者のその人らしい生活を支える看護実践のあり方に関する研究

Research on Nursing Practice to Support the Personable Lives of

Residents in Nursing Homes for the Elderly

岐阜県立看護大学大学院看護学研究科

学籍番号 1218002

堀田 将士

Masashi Hotta

第1章 序論

I. 研究の背景と動機

介護保険施設の1つである特別養護老人ホーム（以下、特養とする）は、介護を必要とする者の日常生活を支援する施設であり、入所者は終の棲家として生活することが多い。現在、特養の要介護度は上がっており、特養の看護師・准看護師（以下、看護職とする）は多様な医療的ニーズへの対応や重度の認知症への対応などが求められる。特養の看護職は、医療行為や健康状態の把握に時間を費やしているが、会話や日常生活援助を増やしたいと思っており（加藤ら、2006）、日々の忙しさの中においてもコミュニケーションや日常生活援助を充実させたいという思いがあると考えられる。また、特養の入所者は、慣れない環境や施設のルールの中でこれまで一緒に過ごしてきた家族以外の人々との生活することになるため、入所者がその人らしく生活することができるように関わるのが大切になると考える。その人らしさを活かした関わりは、意思決定の促進や生き生き生活することを可能にすることや（黒田ら、2017）、QOLに影響することからも（小和田ら、2011）、特養の看護職が入所者のその人らしい生活を支えることは、特養という生活の場において入所者が人生を終えるその時まで尊厳が保たれながら生活を送ることに繋がると考える。

しかし、特養の看護職は人数が少ない中で多くの入所者の支援を行わないといけない現状もあり、医療行為や通院などに追われコミュニケーション不足などが生じる可能性があるなど、入所者のその人らしい生活を捉え支援することに難しさがあると考えられる。そのため、特養の入所者への実践を通して、その人らしい生活を支える看護実践のあり方を検討する必要があると考えた。

II. 研究目的

本研究の目的は、A 特養の看護職の入所者に対する思いやこれまでの看護職自身の看護実践を振り返り、さらに入所者のその人らしい生活を支えるための看護実践を通じて、特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践のあり方を検討することである。

本研究では、その人らしい生活を「施設の看護職や介護職などのスタッフが捉えたその人（入所者）の姿、価値観、性格など個々人によって個別性のある人物像であるその人らしさを基にした生活」とする。

Ⅲ. 研究方法の全体構成

本研究は研究 1、研究 2、研究 3 の 3 つの研究から構成される。

研究 1 では、A 特養の看護職、介護職・介護支援専門員・管理栄養士・生活相談員（以下、看護職以外の施設スタッフとする）、施設長、嘱託医、A 特養の入所者とその家族、他施設の看護職を対象に、A 特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践の現状と課題を明らかにする。

研究 2 では、「入所者のその人らしい生活を支える看護実践における課題に向けた取り組み方針（以下、取り組み方針とする）」を作成し、A 特養の入所者に対してその人らしい生活を支える看護実践を実施する。取り組み後に、入所者とその家族への面接調査を実施し、その結果と看護実践の振り返りを施設長と看護職で共有し、評価する。また、取り組み方針の修正を行う。

研究 3 では、A 特養の看護職、研究 2 で研究対象の入所者及び家族に関わった看護職以外の施設スタッフ、嘱託医を対象とした調査を行い、その結果を基に施設長に看護実践の変化や今後の課題についての面接調査を実施する。

Ⅳ. 倫理的配慮

研究協力者に、研究目的、方法、研究協力者が協力すること、研究への参加は自由意志であること、匿名性を保証すること、不利益が生じないための配慮など書面を用いて口頭で説明し、同意を得た。本研究は、岐阜県立看護大学大学院看護学研究科論文倫理審査部会の承認を得て実施した（承認年月：2019年5月【通知番号20219-A002D-2】、2020年10月【通知番号2020-A003D-2】）。

第 2 章 研究 1：A 特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践の現状と課題の明確化

研究 1 の目的は、A 特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践の現状と課題を明らかにすることであった。A 特養の看護職、看護職以外の施設スタッフ、施設長、嘱託医、A 特養の入所者とその家族、他施設の看護職を対象に調査を実施し、その結果を資料として、A 特養のその人らしい生活を支える看護実践の現状と課題を検討し明らかにした。

Ⅰ. A 特養の看護職の入所者のその人らしい生活を支える看護実践の現状の把握

A 特養の看護職を対象とし、半構造化面接を実施した。面接内容は逐語録を作成しデータとした。作成した逐語録を熟読し、質的に分析した。同意の得られた 2 名の看護職からは、その人らしい生活を考えるところまで至っていないなどの意見があった。また、A 特養の看護職の入所者のその人らしい生活を支える看護実践の現状として、入所者を中心とした援助の難しさやその人らしい生活を支援している実感がないこと、看護実践を振り返る機会がないことなどが挙げられた。

Ⅱ. A 特養の他職種の入所者への思い、看護職に対する思いの把握

A 特養の看護職以外の施設スタッフ、施設長、嘱託医を対象とし質問紙調査を実施した。職種などは単純集計し、自由記述は質的に分析した。同意の得られた 29 名が入所者の生活支援において大切にしていることは、その人らしく生活してもらうことやこれまでの生活を継続すること、安心安楽な生活を送ることなどであった。また、その人らしい生活を支えるために日々取り組んでいることは、入所者の思いや希望が実現できる関わりや入所者の生活環境やペースに合わせた関わり、他職種との連携などに関する内容であった。その人らしい生活を支える上で看護職に求める役割や機能、期待することは、他職種連携や、入所者の健康管理や医療処置、看取り

の支援、入所者とその家族の思いの把握などに関する内容であった。

Ⅲ．入所者とその家族の A 特養における生活や施設スタッフが実施する援助に対する思いの把握

A 特養の入所者とその家族を対象とし、半構造化面接を実施した。面接内容は逐語録を作成しデータとした。作成した逐語録を熟読し質的に分析した。同意の得られた 3 名の入所者の施設に対する思いは、施設では話をする機会がない、施設の生活を楽しんでいること、自分のことは自分で行っているなどの意見があった。施設のスタッフに対する思いは、身体状況に合わせて生活を支援してくれるという思いがある一方で、お世話になっているという思いから自分の思いは伝えられないことや、希望に対応してもらえないため諦めるなどの思いもあった。スタッフに対する望み・求めること・改善してほしいことは特にないなどの意見があった。

同意の得られた 3 名の家族の入所者の施設における生活に対する思いは、施設でもこれまでの生活をしてほしいや、施設の生活に安心感あることなどがある一方で、家族として入所者に関わることの難しさがあるなどの思いがあった。施設スタッフの入所者に対する援助への思いは、入所者の思いが実現できるような関わりを感じていることや、施設に任せるしかないなど思っているなどの意見があった。家族のスタッフに対する望みや求めること、改善してほしいことは、スタッフへの対応に満足しているため望むことはないなどが挙げられた。

Ⅳ．他施設における看護職のその人らしい生活を支える看護実践の現状の把握

他施設の看護職を対象とし、半構造化面接を実施した。面接内容は逐語録を作成しデータとした。作成した逐語録を熟読し、質的に分析した。同意の得られた他施設の看護職 2 名が考えるその人らしい生活は、入所者が選択できるような生活を送ることなどであった。また、その人らしい生活を実現するための看護実践として、苦痛に対応できるような観察や入所者の思いを叶える関わり、介護職との協働などに関する内容であった。その人らしい生活を支える看護実践上の課題として、入所者の思いに応えることができていないことや職場風土に関する内容であった。

Ⅴ．A 特養の入所者のその人らしさを支える看護実践の現状と課題の明確化

研究 1 のⅠ～Ⅳの結果を施設長と共有し、A 特養のその人らしい生活を支える看護実践の現状と課題について 2 回検討した。その後、施設長と検討した課題を基に看護職と検討会 3 回実施した。最後に施設長と検討会を実施し、A 特養のその人らしい生活を支える看護実践の現状と課題を明確化した。検討会の内容をデータとし逐語録を作成した。作成した逐語録を熟読し、質的に分析した。A 特養のその人らしい生活を支える看護実践の現状と課題は、【看護職として関わる場面を活かせず、入所者と十分な話をすることや入所者の言葉を待ち関わるができいてないため、入所者の話を傾聴する必要がある】、【介護職と協働するために介護職を支援する必要がある】、【家族が入所者の施設の生活に関わることの難しさがある】など 10 の現状と課題に整理された。

第 3 章 研究 2：入所者のその人らしい生活を支える看護実践に向けた取り組み方針の考案と実施

A 特養のその人らしい生活を支える看護実践の現状と課題を基に、取り組み方針を作成するこ

とを目的とした。

I. A 特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践に向けた取り組み方針の考案

研究1で検討した10のA特養のその人らしい生活を支える看護実践の現状と課題を基に筆者が取り組み方針の素案を作成し、その後施設長と看護職と検討会を実施し、取り組み方針の原案を作成した。検討会の内容は逐語録を作成しデータとした。作成した逐語録を熟読し質的に分析した。検討会で得られた意見を基に10の素案の修正を行い、【入所者への援助場面を活かし、入所者の思いを捉えることを意識して関わる】、【特養の看護職の役割、看護職の目標や看護実践の方向性を共通認識し援助する】、【介護職と意見交換を行い介護職と一緒に入所者の援助に介入する】等7つの取り組み方針を原案とした。取り組み方針の原案の作成後にはA特養の看護職と共有した。

II. 入所者のその人らしい生活を支える看護実践の実施と評価、および取り組み方針の原案の修正

1. 看護職を対象とした学習会の実施

A特養の入所者を対象とした取り組みを行う前に、取り組み方針の「特養の看護職の役割、看護職の目標や看護実践の方向性を共通認識し援助する」に基づいて、A特養の看護職に向けた学習会を実施することとした。学習会の準備では、特養の看護の特徴や役割、その人らしさを資料に盛り込み、施設長と看護主任とで資料内容を確認し、その後学習会を実施した。学習会の資料の準備や、学習会実施後の施設長と看護主任との学習会の振り返りの内容を記録したものをデータとし整理した。学習会の資料準備では、施設長と看護主任からは、「文字が少し多い感じがする」、「内容を理解するためには丁寧に解説しながら進めることが必要かもしれない」などが挙がり、具体例を入れるなど、進め方を考えた。学習会は2回実施した。学習会の実施後に施設長と看護主任が感じたことは、日々の看護実践の振り返りをして話していること、看護職が大切にしていることが理解できたこと、看護職間での話し合うことへの難しさなどが挙がった。

2. 研究対象者の決定と取り組み方針の原案に基づいた援助の実施

A特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践に取り組む対象者は、看護職が看護実践を行う上で困難さを感じている入所者を施設長と看護職と話し合いを行い、研究対象者を決定した。研究対象の入所者とその家族に対し、取り組み方針の原案を基に看護実践に必要な具体的な看護援助を看護職と検討し、看護援助を基に援助を実践した。

研究対象者への看護実践では、同意の得られた看護職3名（看護主任含む）や看護職以外の施設スタッフの具体的な看護実践の内容、対象者の言動、他職種の言動や協働内容等をデータとした。また、看護主任が行った助言内容や看護職や看護職以外の施設スタッフの入所者への関わりから捉えた内容、筆者と施設長と共に検討した内容等を記録したものをデータとした。研究対象である入所者への取り組み方針の原案を用いた看護実践の内容については、記録した実践内容、対象者の言動、他職種の言動や協働内容、ケース記録に記録された内容などを経時的に整理した。その後、取り組み方針ごとにA特養のその人らしい生活を支える看護実践の実践内容などを抽出し整理した。

研究対象者はA特養の2名の入所者とし、取り組み方針に基づいて実践した。各事例への取り

組みは看護実践の定着を目指し、1 事例当たりの取り組む期間を 1～2 カ月程度を目安に取り組むこととした。

1 事例目の D 氏への看護実践では、取り組み方針の「入所者への援助場面を活かし、入所者の思いを捉えることを意識して関わる」に基づき、D 氏の施設における生活状況などを確認し、身体の衰えや家族に迷惑をかけること、最期まで生きていきたいという思いなどを持ちながら生活していることを把握した。その後、取り組み方針の「特養における看護職の役割を理解し、看護職の看護実践の方向性を共通認識する」に基づき、看護主任や看護職と D 氏のその人らしい生活やその生活を支えるための看護実践について検討し、D 氏のその人らしい生活は【生活の中で自分のことは自分で行うことができる生活】などとした。また、取り組み方針の「介護職と意見交換を行い、介護職と一緒に入所者の援助に介入する」、「家族が希望する入所者の生活を確認し、入所者の生活に反映できるように関わる」などから、家族へのインタビューの実施、介護職との意見交換、看護職間の看護実践の共有などを行いながら、自分のことができる身体機能の維持に向けて下肢の機能維持に向けた足漕ぎ運動を取り入れ、D 氏のその人らしい生活を支えることができるように取り組んだ。

2 事例目の E 氏への看護実践では、取り組み方針の「入所者への援助場面を活かし、入所者の思いを捉えることを意識して関わる」に基づき、E 氏の施設における生活状況などを確認し、これまで自分自身の信条をもって生活してきたことや自分のことは自分で解決できる人間になりたいなどの思いを把握した。その後、取り組み方針の「特養における看護職の役割を理解し、看護職の看護実践の方向性を共通認識する」に基づき、看護主任や看護職と E 氏のその人らしい生活やその生活を支えるための看護実践について検討し、E 氏のその人らしい生活は【健康であり自分のことは自分でできる生活を続けること】などとした。また、D 氏と同様に取り組み方針の「介護職と意見交換を行い、介護職と一緒に入所者の援助に介入する」、「家族が希望する入所者の生活を確認し、入所者の生活に反映できるように関わる」などから、家族へのインタビューの実施、介護職との意見交換、看護職間の看護実践の共有などを行った。その中で膀胱留置カテーテルを使用している E 氏への対応について検討し、介護職と協働して対応できるように関わり、E 氏のその人らしい生活を支えることができるように取り組んだ。

3. 取り組み後の研究対象の入所者とその家族による援助に対する評価

研究対象の入所者とその家族に取り組みの評価を得るために、入所者には半構造化面接を実施し、家族には質問紙調査を実施した。入所者への面接調査の内容は逐語録を作成しデータとした。作成した逐語録を熟読し、質的に分析した。入所者の家族に実施した質問紙調査は、自由記述の内容は意味を損なわないように要約し質的に分析した。

研究対象となった 2 名の入所者は、施設における生活の変化、看護職や介護職等の実践内容などについて、スタッフの声掛けの多さや、親切な対応などを感じており、さらに、このまま最期を迎えたいなどの思いを話された。また、家族は、生活の変化や思いに沿った生活が送ることができるかについては、穏やかな表情や笑顔で過ごせているなど思っていた。また、スタッフに伝えたいこととして、感謝しているなどの意見があった。

4. 取り組み方針の原案の修正に向けた検討

筆者と同意の得られた3名の看護職、施設長で取り組み方針の原案を基に取り組んだ看護実践の振り返りと、入所者及び家族への取り組み後の調査結果を共有し、取り組み方針の原案に沿って実施した看護実践の評価を行い、取り組み方針の原案の修正のための検討会を実施した。看護職、施設長と検討した内容は逐語録を作成しデータとした。作成した逐語録を熟読し、質的に分析した。分析した内容を基に取り組み方針の原案を修正した。

施設長と看護職と話し合った各取り組み方針と行動方針に対する意見として、【看護職が理解できる用語も用いて取り組み方針や行動方針の表現する必要がある】、【看護職が行動に移しやすい用語を用いて示す必要がある】、【看護職が入所者の生活を支えているということを実感できるように支援する必要である】などの意見があった。施設長と看護職との意見を踏まえ、3つの取り組み方針の修正を行った。

第4章 研究3：入所者のその人らしい生活を支える看護実践の取り組みの評価

研究2で取り組み方針を基に取り組んだ看護実践の内容をA特養の看護職との振り返りと、看護職以外の施設スタッフや嘱託医への質問紙調査から入所者のその人らしい生活を支える看護実践の評価を行、また、実施した評価を基に施設長と共有し、入所者のその人らしい生活を支える看護実践の取り組みの評価をすることを目的とした。

I. A特養の看護職の取り組みを通じた日々の看護実践や思いの変化の把握

A特養の看護職に半構造化面接を実施した。面接内容の逐語録を作成しデータとした。作成した逐語録を熟読し、質的に分析した。同意の得られた2名の看護職から、その人らしい生活を送ることができる看護実践の振り返りについて、その人らしい生活を支える看護実践ができたという思いもある一方で難しさを感じていることや、その人らしさを理解することはできたことなどが挙げた。また、情報共有に差が生じないようにしないといけないこと、その人らしい生活が何であるかを考えて関わるのが大切といった意見があった。その人らしい生活を送ることができる支援をするために日々の看護実践で変化したことについては、看護実践の変化を感じていないこと、その人らしさを捉えることができていないことなどが挙げた。その人らしい生活を支える入所者に対する思いの変化したことについては、これまでの人生も考えながら入所者と話すことや、介護職と役割を線引きせず支援できるようにしたいなどが挙げた。その人らしい生活やその生活を支える看護については、その人らしい生活とは自分のやりたいことができることや思ったことが言える生活であること、目に見えないその人らしさを出すことは難しいなどが挙げた。

II. A特養の看護職以外の施設スタッフと嘱託医の取り組み前後の入所者への援助や看護職に対する思いの変化の把握

A特養の看護職以外の施設スタッフに対して、質問紙調査を実施した。職種などの選択項目は単純集計を行い、自由記述については質的に分析した。研究2において一緒に取り組んだA特養の看護職以外の施設スタッフ8名に質問紙調査を配布した。今回は嘱託医との協働はなかったため、質問紙を配布しなかった。質問紙調査に回答した職種は、介護職と生活相談員であり、職種の経験年数の平均は12.4年であった。入所者がその人らしい生活を送ることができたかにつ

いては、入所者が望むことに対応できたことなどがある一方で、介護職もゆとりがなく話を聞く時間も限られていたことからその人らしい生活を送ってもらうことへの難しさや、その人らしい生活の理解の難しさなどを感じているようであった。入所者のその人らしい生活を理解し支援することができたかについては、入所者とコミュニケーションをとり本人のペースで生活することができたことなどが挙がる一方で、苦痛の軽減ができなかったことなども挙げた。入所者その人らしい生活を支援する上で看護職と連携・協働して取り組むことができたかについては、報告・連絡・相談できたなどの意見もあったが、看護職と情報共有できたか分からないなども挙げた。入所者のその人らしい生活を支える上で看護職に求める役割や機能、期待することについては、入所者への援助や介護職に対する支援などであった。入所者のその人らしい生活を支援する上での入所者に対する思いや関わり方について、入所者に合わせた声掛けやその人らしさの発見などであった。また、介護職は取り組みを通して、その人らしさを考える機会になったことや入所者の理解や支援の難しさなどを感じているようであった。

Ⅲ. 施設長が捉える日々の看護実践の変化の把握と新たな課題の検討

A 特養の看護職の面接結果と看護職以外の施設スタッフと嘱託医とへの質問紙調査の結果を施設長と共有し、半構造化面接を実施した。面接内容の逐語録を作成しデータとした。作成した逐語録を熟読し、質的に分析した。施設長が捉える取り組み後の看護職の看護実践の変化は、看護職の話し合いや入所者への関わり方に関することなどが挙がり、また介護職との協働の難しさや介護職への支援の必要性などが挙げた。特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践における今後の課題は、他職種協働の継続とその人らしい生活を支える看護実践の継続であった。

第5章 全体考察

研究1～3の結果より、特養の入所者のその人らしい生活を支えるための看護実践のあり方、特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践に取り組む意義、特養の入所者への看護の質の向上についての考察と、本研究の限界について述べる。

Ⅰ. 特養の入所者のその人らしい生活を支えるための看護実践のあり方

1. その人らしい生活の把握に向けた入所者への関わり

本研究の取り組みにおいて、限られた時間の中で入所者の思いを捉えることを意識することにより、入所者の生活背景や思いについて把握することができた。そのため、特養の看護職は、人数が少なく一人の入所者に時間をかけて関わるのが難しい現状があるが、看護職の意識が変化することで限られた時間の中でも、入所者とコミュニケーションを図ることができ、入所者の理解を進めることができると考える。また、入所者は様々な思いを抱えている存在であると理解し、思いや生活背景を捉えることを意識して、入所者が語るができるような声かけや関係性の構築を目指すことも必要である。

2. その人らしい生活を看護職間で共通認識し、その生活の実現に向けた看護実践を検討すること

本研究では、看護職だけではなく、介護職が捉えている入所者の状態、入所者や家族の思いな

ども共有し、看護職間でその人らしい生活を共通認識しその生活を支えるための援助を検討してきた。教育課程や看護職としての経験によって看護に対する様々な価値観を持っている特養の看護職は、入所者のその人らしい生活を様々な考えや思いから捉えると考えられるため、その人らしい生活を共通認識できるように各看護職の思いの共有や、介護職が捉えているその人らしさなどを確認したうえで、その人らしい生活が何かを話し合うことが必要となると考える。

3. 他職種の専門性や現場の状況に即した連携・協働

本研究の研究1や研究3では、介護職は看護職に対して情報共有や相談できること、介護職に助言をしてほしいなどを求めている、また、研究2では介護職との情報共有や援助の検討などを行い、その人らしい生活を支えることができるように取り組んできた。入所者のその人らしい生活を支えるためには、必要な援助を伝えるだけではなく、介護職は入所者をどのように捉えているのか、支援の必要性をどのように考えているかなどについて介護職と共有できる場を設け話し合うことが必要であると考え。また、介護職の専門性を理解することや、介護職だけでも援助を実施できるような支援が求められると考える。

4. 家族の真の思いを把握し入所者のその人らしい生活に反映できる関わり

研究1では入所者の家族の入所者の生活に対する思いとして、自宅で生活してきたようなことを施設でも行ってほしいという思いなどがあり、また、施設のスタッフに対しては入所者の思いが実現できるように関わることでできているなどの意見であった。しかし、家族として十分に関わることでできないという思い等を感じている意見もあり、自宅で介護することができない申し訳なさや、特養で入所者の生活の支援をしてもらうことへのありがたさから、家族は十分に思いを伝えることができていない可能性も考えられた。そのため、家族の思いを十分に捉えた上で家族に介入することが必要になると考える。

また、看護職は家族に対して介入することが少ないことについて、研究2の取り組み方針の原案を見直した際に振り返られていた。そのため、家族が思いを伝えたくても伝えられないことを理解することや、看護職として家族に関わる際に身体状況の変化だけではなく、安定して生活していることを看護の専門性を活かして説明することが必要である。このような関わりを通して家族と関係性を構築することは、家族の入所者の状態の適切な把握や施設での生活の安心感や満足感にもなり、そのことが入所者のその人らしい生活を支えることに繋がると考える。

II. 特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践に取り組む意義

1. 特養の入所者のその人らしい生活

本研究を通じてその人らしい生活とは、入所者のその人らしさを基にした生活だけではなく、現在から未来にかけて生きていくための方向性を示す生活であると考えた。その人らしい生活は、他者が認識する生活であるため、様々な視点から捉えた入所者の情報を丁寧に統合し、また、その過程を何度も繰り返しながらその人らしい生活を明確にすることが必要になると考える。

2. 特養の入所者のその人らしい生活を支えることの重要性

本研究では入所者のその人らしい生活を支える看護実践に取り組むことで、入所者は施設での生活を肯定的に捉えることができていた。入所者のその人らしい生活を支える看護実践を繰り返す中で、看護職と入所者との関係性が構築されることによって、入所者が施設における生活

や今後の人生について前向きに考えることなどに繋がったと考える。このように、入所者のその人らしい生活を支えることは、入所者が人生を終えるその時まで望む生活を送ることを支えることになり、さらには最期のその時まで入所者の思いが尊重されることに繋がると考える。

Ⅲ. 特養の入所者への看護の質の向上

1. 日々の看護実践の場を看護職のケアの質を高める機会として活用し、看護職の経験を積み重ねる

特養の看護職は、多くの入所者や施設の職員等にも多様な役割を果たす必要があり、看護職のケアの質を高める機会を設けることが難しい状況にある。本研究では、看護職に学習会を実施したが、学習内容が十分に浸透したかは分からないことや、入所者に対する取り組みでは看護職は看護実践の評価の難しさや、その人らしい生活を支えることを実感できていない現状があった。しかし、研究2の取り組みを通じて、看護職の関わり方などに少しずつ変化も見られるようになってきたことや、研究1と比べて研究3では看護職自身の言葉でその人らしい生活を語ることができており、各看護職が振り返ることや考える機会となっていたと思われた。このように、日々、多忙であり人数が少ない看護職がケアの質の向上や充実を目指すためには、施設内外の研修会だけではなく、入所者への関わりから得られた経験などを話し合う機会として活用することや、話し合える体制の整備が必要になると考える。

2. 看護職の思いや意見を伝え合うことができる職場風土を醸成する

本研究では、研究2の入所者を対象として看護実践を行う上で、看護職間で何度も話し合うことによって、当初は、看護職自身に自信がなく発言できなかったなどがみられたが、自分の意見を伝えられること、入所者のことを考えて発言できるなど、少しずつではあるが看護職に変化が見られた。このように看護職間で話し合うことができる職場風土を作り上げていくことが、看護職の看護実践の振り返る機会となり、看護職の能力を向上させるきっかけになると考える。

Ⅳ. 本研究の限界

本研究は、1施設を対象とした研究であり同意の得られた看護職の人数が少ないことや入所者への看護実践も2事例ということもあり、特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践のあり方としてすべてを表しているとは言い難いと考え。今後は、さらに看護実践の事例を増やすことや、他施設においても同様に取り組むことを通して、さらに特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践のあり方を検討し追及する必要があると考える。

引用文献

- 加藤基子, 丹治優子, 廣田玲子. (2006). 介護保険施設における看護職員の看護活動と看護に対する認識. 老年看護学, 10 卷 (2), 92-102.
- 黒田寿美恵, 船橋眞子, 中垣和子. (2017). 看護学分野における『その人らしさ』の概念分析 Rodgers の概念分析法を用いて. 日本看護研究学会雑誌, 40 卷 (2), 41-150.
- 小和田美由紀, 川田智美, 藤本桂子ら. (2011). 医療者がとらえる「その人らしさ」に関する研究内容の分析. 群馬保健学紀要, 32 卷, 43-50.